

Title	円盤を持った女性土偶：その性格と機能
Sub Title	The nature and function of female figurines with disks
Author	杉本, 智俊(Sugimoto, Tomotoshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2001
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.70, No.3/4 (2001. 7) ,p.135(485)- 170(520)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20010700-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

円盤を持った女性土偶―その性格と機能

杉本智俊

古代パレスチナで女性土偶が大量に用いられていたことはよく知られており、これまでに数千点に及ぶ出土例がある。これらはしばしばアシユタロト女神やアシエラ女神と関連づけられ、古代イスラエル宗教の実体を知る糸口になると考えられてきた。しかし、実際にこれらがどのように用いられ、どういった神々を表しているのかについては意見が分かれており、いまだに十分説得力のある学説は存在しない。それどころかこれらが宗教的なものかどうかさえはっきりしていない。本稿では、これらの土偶のうちでも特に特徴的な型式、円盤を持った女性土偶に絞って、その性格と機能を説明してみたい。円盤を持った女性土偶に焦点を当てる理由はいくつかある。まずパレスチナで本格的な発掘調査が始まってすでに1世紀以上がたち、十分な出土例が知られ、女性土

偶のカタログも作られるようになってきているのに、円盤を持った女性土偶に関する総合的研究はあまりなされていないからである。また、これらの女性土偶をすべて一気に扱うとなると、あまりに例が多く、議論が大雑把にならざると得ないが、円盤を持った型式だけに限定すると、より明確で緻密な議論が可能だからである。第3に、この型式の土偶は鉄器時代第Ⅱ期（イスラエル王国期）にさかんに用いられたことが知られており、文書資料（旧約聖書）との関連で検討できる可能性があるからである。第4に、この型式は円盤といった明確な特徴を持っており、円盤の性格が分かれば、それをもとに土偶そのものの性格を説明できる可能性が高いからである。そして、この型式の土偶の性格が分かれば、他の型式との関係も含め、古代パレスチナの女性土偶全体の理解に

近づくことができるであろう。

一 研究史および方法論

(1) 女性土偶全般に関する研究史⁽¹⁾

古代パレスチナにおける女性土偶の出土例をまとめてカタログを作り、最初に総合的な研究を行ったのはピルツ(一九二四年)である。⁽²⁾その後各地の発掘調査が進み、女性土偶の出土例が増加するにつれ、より多くの例を掲載するカタログが作製されるようになってきた。主要なものとしては、プリツチャード(一九四三年)、ホランド(一九七五年)、エンゲル(一九七九年)、クレッター(一九九六年)の研究を挙げることができるが、現在のところ最も包括的で、よく整理されたカタログはクレッターのものである。⁽³⁾その後、さらにエルサレムのダビデの町で鉄器時代第Ⅱ期以降の土偶が一三〇〇例以上報告されているので、今後の研究ではこれも考慮に入れる必要があるであろう。⁽⁴⁾また、トランスヨルダン出土の土偶⁽⁵⁾に関しても、アムルがカタログを作成している。

これらの土偶は一般に「アシユタロト土偶」と呼ばれてきたが、専門家たちの間ではこの定義は決して明白でない。ピルツ、プリツチャード、ホランドも、これらが

民間信仰のために用いられたことは認めているが、特定の女神に同定することは慎重に避けている。またファウラーは、これらが「おもちゃ」であった可能性もあるとし、単純に祭儀的に解釈することを批判している。⁽⁶⁾M・フォイクトは、新石器時代のイランの土偶について研究し、土偶の機能に 1. 子供のおもちゃ、2. 教育の道具、3. 死者の表現、4. 魔術の用具、5. 宗教における神像の5つの可能性があることを指摘したが、この理論を援用して古代パレスチナの土偶の定義を厳密化しようとする者もいる。⁽⁷⁾

しかし、理論上はともかく、具体的に古代パレスチナの女性土偶に関して「教育的」機能を主張する者はほとんどいない。「死者の表現」であるという説を唱える者も少い。M・タドモルはエジプトの「妾の飾り板」とよく似た特殊な型式の板状土偶について「死者の表現」説を主張したことがあるが、あまり同調者を見ていない。⁽⁸⁾実際この型式の土偶の例は非常に少なく、女性土偶を代表しているとは言えない。全体的に考えるなら、女性土偶は墓域からだけでなく、公共建造物や住居などさまざまなコンテキストから出土しているので、これらすべてを死者の表現と見ることには無理があるであろう。また

ドウ・ヴォーのように、女性土偶を「おもちゃ」であると定義する者もいないわけではないが、その数は限られている。⁽⁹⁾これらの女性土偶は、バリエーションも少なく、壊れやすく、子供に魅力的に造られているわけでもないので、「おもちゃ」と考えるには問題が多い。

むしろ大半の研究者は、これらの女性土偶は護符として用いられたり家庭用祭壇で個人的に祈ったりするために使われたと考えている。⁽¹⁰⁾フォイクトの理論に合わせる、「魔術の用具」という範疇に入るであろう。これらの土偶が粗雑な造りであること、貴金属が使われていないこと、比較的小型であること等を考えると、神殿礼拝の対象とされた神像というよりも、民間信仰レベルで用いられていた可能性が高いように思われる。少なくともすべての土偶が公式礼拝の神像ではなかったであろう。

しかし、この魔術的機能は、必ずしも宗教的機能と峻別できない。初期の民俗学においては、魔術と宗教を対立するものとして描く傾向があったが、最近では、1つの宗教の中にも公式の礼拝、神学から多分に魔術的な庶民の実践までさまざまなレベルがありうる⁽¹¹⁾ことが認識されてきている。願掛けのような行為が、より大きな宗教的世界観の枠組みの中で行われることは、珍しいことでは

はない。こうした可能性を考慮する時、これらの女性土偶を個人的あるいは家庭内の信仰の道具と捉えるとしても、それがどの程度確立されたカナン、イスラエルの宗教と関連していたかは検討される必要があるであろう。

たとえば、最近ではユダ出土の柱状土偶にのみ焦点を当てた研究が多くなされているが（前述のエンゲル、クレッターの研究参照）、これらのユダ式柱状土偶は民間信仰レベルで用いられたものであり、同時に豊饒女神のアシエラを表しているという見解が広く受け入れられるようになってきている。⁽¹²⁾この背後には、ヒルベツト・エル・コムやクンティレット・アジュルツドから「ヤハウエとそのアシエラ」という表現を含む碑文が発見されたことや旧約聖書における「アシエラ」という用語の研究が進んだことが大きな影響を与えている⁽¹³⁾であろう。アシエラは、基本的に南ユダ王国で信仰された豊饒神で、民間信仰ではしばしばヤハウエの配偶神とみなされていたことが知られるようになってきた。そのため、この型式の土偶はアシエラを表す豊饒祈願の用具であると受け止められるようになったのである。

その他の型式の土偶についての研究はあまりなされていないが、⁽¹⁴⁾それらについても、何らかの意味で民間信仰

と関わりがあつた可能性が最も高いと考へてよいであらう。また、その信仰がどの程度公式の宗教と関わりがあつたかを検討することも、ユダ式柱状土偶とアシエラの場合同様、必要なことであらう。

(2) 円盤を持った女性土偶に関する研究史

女性土偶の内、円盤を持った型式のものに限定してその性格を定義しようとする試みは、それほど多くなされてはいない。しかし、この円盤をどのように解釈するかについては、主として3つの立場を区別することが可能であらう。

まずこの円盤を太陽(日輪)⁽¹⁵⁾の表現だとする説が、R・アミランによつて主張された。アミランはゲゼル出土の土偶について論じ、その円盤の周縁部にある装飾が北シリア出土の象牙細工に描かれた有翼日輪の装飾と似ていることから、この土偶が太陽女神を表しているとした。しかし、これは特定の土偶の、装飾の詳細に関する解釈で、この議論を円盤を持った土偶全体にあてはめることには無理があるであらう。事実、その後この立場を支持する者はほとんどいない。

第2の立場は、この円盤をタンバリンとする説である。

「タンバリン」と言つても、現在のタンバリンのように、周囲に小さなシンバルのような金属片はついていないので、「手打ち太鼓(ハンド・ドラム)⁽¹⁶⁾」といった厳密な用語を用いる者もいる。この立場はヒラーズによつて主張され、その後多くの支持者を得ている。⁽¹⁷⁾当然のように、古代音楽の研究者の中にもこの立場を取る人たちが多い。⁽¹⁸⁾

ヒラーズは、タアナク出土のこのタイプの土偶の型について論じているが、この種の土偶は前2千年紀のメソポタミアの土偶から続くものだとしている。メソポタミアのものの中には、円盤が明らかに「叩かれている」例があり、パレスチナ出土のものでもテル・エル・ファラー(北)⁽¹⁹⁾出土のものなどは叩かれているように見えると主張する。また、後のローマ時代の大地母神キュベレもタンバリンを持った姿で描かれており、熱狂的に踊る祭儀を行っていたので、それとの関連性も論じている。⁽²⁰⁾キュベレは、ルキアノスによると、アナトとアシユタロトが合体したアタルガティスと同一視されている。これらの土偶の中には冠をかぶつたものもあり、キュベレの先駆けとなつたカナンの女神を表していた可能性もある。すなわちこの立場は、円盤を持った姿勢がタンバリンを叩いているように見える例があることと、前二千年紀

のメソポタミアからローマ時代に至る女神の祭儀に一貫してこのような例が見られることが、2つの主要な論拠である。

第3の立場は、この円盤をパンとする説である。P・ラップはタアナク出土の土偶の型の円盤はパンであると報告した。⁽²¹⁾後にラップ自身はタンバリン説に変わってしまったが、その後もこの説を支持する者は続いている。また、ラップ以外にも、円盤を持った女性土偶が発掘されると、詳しい議論を抜きにしてパンではないかと提案されること⁽²²⁾がしばしばある。おそらくこれは、円盤の大きさが極端に大きかったり小さかったりしてタンバリンと考えにくい場合や持ち方が必ずしもタンバリンを打っているように見えないものがあるためだと思われる。

この立場はエレミヤ書に記されている「天の女王」⁽²³⁾との関連で論じられることも多い。エレミヤ書7・18、44・19では、天の女王にパン、酒、香が捧げられたことが記されている。天の女王はメソポタミアのイシュタルかそれがカナンに輸入された形のアシユタロト、あるいはその混合したものと一般に考えられている。

天の女王にパンを捧げる儀式が存在したことは、ツロ近郊で発見された地母神に数人の礼拝者がかまどから出

円盤を持った女性土偶―その性格と機能

したパンを捧げる様子を表した粘土製模型によって示されており、⁽²⁴⁾キプロスのキティオン出土の碑文にも女王のためにパンが焼かれたことが記されている。イシュタルのために、パンが捧げられたことは「イシュタル神への賛歌」15・20⁽²⁵⁾、22、「ギルガメシュ叙事詩」6・58、60等に記されている。さらに、北シリアのマリからは、パンを焼くためのものだと考えられる型が47例出土しており、円形で同心円模様を持つものや四角で裸体の女神が描かれたもの⁽²⁶⁾が見られる。W・E・ラストは、タアナク出土の円盤を持った女性像の型をこのマリ出土のパンの型と関連づけている。⁽²⁷⁾もしこの円盤をパンと理解できるなら、この女性⁽²⁸⁾は天の女王、すなわちアシユタロトあるいはイシュタルを表していることになる。

C・メイヤーズは、こうした3つの立場とは少し違った角度から円盤を持った女性土偶を分析し、その中に2つのサブ・タイプがあることを指摘した。⁽²⁸⁾1つは、裸体か半分裸体の女性像で、円盤を身体に対して水平に構えたものである。このサブ・タイプは、多くの装飾品やこった髪飾りをつけている場合が多く、円盤には点や同心円模様がついている場合が多い。もう1つのサブ・タイプは、ハーバード・セミティック・ミュージアム所蔵

のものに代表されるもので、フレヤ・スカートをはいたような着衣で表されている。円盤は身体に垂直に構えられており、髪は自毛のおさげ、装身具はわずかである。メイヤーズは、前者が何を表しているかについてあまり明確に論じていないが、後者は聖書に記されているタンバリンを手に歌い踊りながら凱旋してきた兵士たちを迎え入れた女たちと関係しており、人間の女性を表している⁽²⁹⁾と主張している。

こうしたメイヤーズの立場に対し、R・クレッターやキールとユーリンガーは、円盤を水平に構えるか垂直に構えるかは、土偶製作の技術的問題であって、区別すべきでない⁽³⁰⁾と批判した。しかし、キールとユーリンガーは、これらの土偶が、水平なものも垂直なものも両方、タンバリンを持って兵士たちを迎える人間の女性を表していることを認めている⁽³¹⁾。彼らは、カラフ出土の象牙細工に描かれた楽団等との関連を指摘し、楽団には通常女性のタンバリン奏者がいたとした⁽³²⁾。鉄器時代第ⅡA期には、神々の像を直接描くことが減少する傾向にあり、かつて戦争の女神アナトの果たした役割をタンバリンを持った人間の女性が果たすようになったと主張している。

また発掘報告書の中には、円盤をある時にはタンバリ

ン、ある時には別物と定義している場合がかなりある。円盤の大きさや形、構え方に違いがあるからであろう⁽³³⁾。R・クレッターも、板状土偶に片手で比較的大きな円盤を持つているものと両手で小さな円盤をもっているものを細分する可能性について言及しているが、くわしい議論はなされていない⁽³⁴⁾。

以上見てきたように、この土偶の持っている円盤の解釈は、太陽、パン、タンバリンと3種類がある。太陽とみならず根拠は薄い⁽³⁵⁾が、パンとタンバリンの説はそれぞれ強い支持があり、今だに明確な結論に至っていない。もし円盤がパンなら、この土偶は天の女王(アシユタロトカイシユタール)を表しており、もし円盤がタンバリンなら、この土偶は地母神の熱狂的祭儀と関係するか女たちが兵士たちを迎える儀式と関係があるという2つの立場がありうる。またこれらの土偶の中にサブ・タイプを認め、いくつかの違ったものを表す可能性も示されている。時代や地域による違いの可能性も含め、これらが本当に均質なサブ・タイプを形成するののかも検討される必要がある。

(3) 問題の所在および方法論

円盤を持った女性像を定義づけようとするこれまでの試みは、わずかな特定の土偶を扱った研究や天の女王、古代オリエントの音楽、図像学といったより大きな研究の一部として簡潔に扱われる場合がほとんどだった。円盤の解釈、着衣の解釈、他の考古資料、文献（聖書）資料との関連なども論じられているが、このような研究の性格上、十分多くの出土例を比較検討し、緻密な議論が構築されていることは少ない。

本稿では、こうした問題を解消するために、まず現在知られている円盤を持った女性土偶をできる限り網羅したカタログを作り、その特徴を検討したい。基本資料としては、現在のところ最も詳細なカタログであるR・クレッターの研究を利用するが、中には写真や線描の入手困難なものも少なくない。³⁵ここでは筆者が確認することができたものに限定してカタログを作り、それにクレッターの資料に含まれていなかったいくつかの例を加えることにする。その上で、これらの土偶はすべて均質なものとみなせるのか、それともいくつかのサブ・タイプに分かれるのか、また型式学的分析で円盤は何だと理解されるべきなのかを明らかにしたい。

円盤を持った女性土偶—その性格と機能

第2に、この時代のほとんど唯一の文献資料である旧約聖書を分析して、これらの円盤の用いられた生活の座(Sitz im Leben)を検証したい。もしこの円盤がタンバリンなら、当時タンバリンはどのように用いられていたのか、パンなら、天の女王の祭儀とどのように関連していたのか、知りうることを整理したい。

最後に、以上2つの研究を統合し、この土偶自身のアイデンティティを検討してみたい。まず、これらは女神なのか人間の女性なのかを検討する必要があるだろう。そして、もしこれらが女神であるなら、それは天の女王なのか、アナト、アシユタロト、アシエラなのか、あるいはそれ以外の女神なのかを絞り込んでいきたいと思う。結論として、この円盤を持った女性土偶の性格と機能が明確化されると、イスラエル王国時代の土偶全体の理解を助けることになり、当時の人々の宗教意識を知る大きな手がかりになるであろう。

二 円盤の性格

本節の目的は、できる限り多くの円盤を持った女性土偶をカタログにし、型式学的に検討して円盤の性格を明らかにすることである。

(1) 板状土偶のカタログ

まず板状土偶に関して、出土地、年代、着衣の変化、円盤の変化をカタログにすると、以下(表1)のようになる。左端の番号は本稿における番号、RKはR・クレッターの *The Judean Pillar-Figurines and the Archaeology of Asherah*, pp. 268-270, 5V. Iron Age Plaque Figurines のうち 5V. 1 Female Plaque Figurines, Holding a Disk of Clay (Drums) の番号を指している。円盤の大きさはS M Lで表し、持ち方は、左手で円盤の下側を支え、右側で中央を打っているように見えるものを「片手」、両手で円盤を両側からあるいは下側から均等に支えているものを「両手」と区別した。円盤や頭部など残存していないものは「-」、残っていても磨耗していたり、写真が不鮮明で十分判別できないものには「?」とした。hはヒメーション(薄衣の洋服)を着用していることを示しており、*はクレッターのカタログによらない筆者独自の資料であることを表している(出典は註参照)⁽³⁶⁾。

(2) 柱状土偶のカタログ

同じように柱状土偶も整理すると、以下(表2)のようになる。装身具に関しては、はりつけ等で形状に明確

表1：板状土偶のカタログ

トランスヨルダン

番号	RK	出土地	年代 (世紀、 紀元前)	着衣	装飾	髪型	円盤の 大きさ	位置	持ち 方	特記事項
T1	1	Irbid	10-9	裸	無	—	M	右	片	
T2	2	Near Nebo	不明	着	無	ボール	S	中	両	
T3	9	Dal Hamiya	鉄I	裸	有	—	M	右	片	
T4	12	Heshbon		裸	有	—	M	右	片	
T5	20	Amman	不明	裸	有	—	M	右	片	
T6	26	Deir 'Alla	不明	裸	有	—	M	右	片	
T7	27	Deir 'Alla	8?	裸	有	—	M	右	片	
T8	28	Deir 'Alla	不明	裸	有	—	M	右	片	
T9	35	Near Kerak	不明	着	無	おさげ	S	中	片	
T10	39	Khirbet Ayun Musa	不明	—	有	—	M	右	片	
T11	40	Deir 'Alla	不明	裸	有	—	S	右	片	
T12	41	不明	不明	着	無	ボール	S	中	両	
T13	*			裸	有	ボール?	M	右	片	神殿模型

北イスラエル

円盤を持った女性土偶—その性格と機能

番号	RK	出土地	年代 (世紀、 紀元前)	着衣	装飾	髪型	円盤 の 大 き さ	位置	持ち 方	特記 事項
N1	3	Beth Shean	鉄 I -10	上裸	有	冠	M	右	片	
N2	4	Beth Shean	11	裸	有	短髪	M?	右?	片?	
N3	5	Beth Shean	11	裸	無	—	M	右	片	
N4	10	Hazor	9	裸	有	おさげ	M	右	片	
N5	11	Hazor	10	裸	有	—	M	右	片	
N6	13	Megiddo	7	上裸?	有	—	M	右	片	
N7	14	Megiddo	11	着	無	ベール	M	右	片	
N8	15	Megiddo	10-9	?	?	?	M	右	片	
N9	16	Megiddo	11	裸	有	—	M	右	片	
N10	17	Megiddo	11	裸	有	おさげ	M	右?		
N11	18	Megiddo	7?	着 h	無	櫛の入っ た長髪	M	中	片	
N12	19	Megiddo	8-7	着 h	無	同上	S	中	片	
N13	22	Samaria	不明	着	無	おさげ	—	—	両	円盤 無?
N14	25	Tel Aphek	10	裸	ネック レスの み	ベール	S	中下	両	
N15	31	Tel 'Amar	10?	裸	有	—	M	右	片	
N16	32	T. el-Farah (N)	11-10	上裸	有	—	M	右	片	
N17	33	T. el-Farah (N)	11-10	裸	?	—	M	右	片	
N18	37	Megiddo	14-12	裸?	?	—	M	右	片	
N19	38	Taanak	10	裸	有	ターバン ?	S	右	片	型
N20	*	Samaria		裸	?	短髪	M	右	片	

南ユダ

番号	RK	出土地	年代 (世紀、 紀元前)	着衣	装飾	髪型	円盤 の 大 き さ	位置	持ち 方	特記 事項
S1	7	Gezer	マカリス ターの "third Semitic" level	裸	有	ベール、 ハトホル 巻き毛	M	右	片	
S2	6	Gezer	同上	裸	有	—	M	右	片	
S3	30	Tel 'Ira	7	裸	有	短髪、髭	M	右	片	両性具有

一四三 (四九三)

に残されていない限り「無」としたが、現在あまりよく残っていない彩色で表されていた可能性もある。クレッターとの照合に関しては、フェニキアのものは、同書二八一—八二頁、SVI. 2. Figurines of Women Playing Drums and Related Types, トランスヨルダンのものは、237頁、4I. Women Playing Drums with Hollow, Wheel-Made Bodies, 北イスラエルのものは、一五四—一五五頁、5III. 6. Drum Playing Pillar Figurines with Hollow Bodies and Moulded Heads from Northern Israel、南ユダのものは、一四七—一七六頁の Judean Pillar Figurines のメイン・リストの番号を用いている。

(3) 板状土偶に関する考察

以下にこれらのカタログについて検討を加えていきたい。

まず板状土偶に関して言うと、着衣、装身具、円盤についてかなりの変化があるにも関わらず、2つの大きなグループを見分けることができる可能性がある。第1のグループは、少なくとも上半身が裸で、多数の装身具を身につけ、中型の円盤を右胸の上に片手で構えているものである。髪型については残存していないものが多く、

残っているものでも変化があったようである。N4をこの典型的な例として挙げることができるだろうが(図1 a)、このグループのものは全36例中26例を占め、主流派をなしていると言えるであろう。⁽³⁷⁾

第2のグループは、着衣で装身具が少なく、小さな円盤を中央に構えているものである。髪型はベールをかぶっているか、おさげになっているものが多い。たとえば、T2 (図1 b) をその典型的な例として挙げることができるが、その他T9、12、N11、12もこのグループに数えることができるであろう。この2つのグループが存在していることは、前述の通りクレッターも指摘している。

しかし、本当にこれらは2つの明確な型式に区分され、別個のものを表現していると言えるのだろうか。これらのカタログをさらに分析すると、そうではなく、これらは1つの型式の中の変化にすぎないことがはっきりしてくる。

その第1の理由は、これらの2つの要素が混在した例が存在することである。N14 (図1 c) は、装身具が少なく、ベールをかぶっており、円盤も小さく、少し下方ではあるが中央に両手で構えられている。胸も強調され

表2：柱状土偶のカタログ

フェニキア

番号	RK	出土地	年代 (世紀、 紀元前)	着衣	装飾	髪型	円盤 の 大 き さ	位置	持ち 方	特記事項
PP1	2	Achzib		着	無	おさげ	M	中	垂直	
PP2	3	Achzib		着	無	べール	M	中	水平	
PP3	7	Shiqmona	9-8?	着	無	おさげ	M	中	垂直	
PP4	8	Tell Qitaf	不明	着?	無	短髪	M	中	垂直	
PP5	9	不明	不明	着	無	おさげ	M	中	垂直	
PP6	13	不明	不明	着	?	短髪	—	—	—	
PP7	14	Achzib	不明	着	無	おさげ	M	中	垂直	
PP8	*	Sarepta	7-	着	無	—	M	中	垂直	
PP9	*	Sarepta	7-	着	無	おさげ	—	中	—	円盤の代わりに鳩を持っている

トランスヨルダン

番号	RK	出土地	年代 (世紀、 紀元前)	着衣	装飾	髪型	円盤 の 大 き さ	位置	持ち 方	特記事項
PT1	1	Nebo	鉄II以降	着	無	おさげ	—	—	—	円盤欠損?
PT2	2	Nebo	鉄II以降	着	無	おさげ	M	中	垂直	
PT3	4	Amman		—	—	—	M	—	?	円盤のみ
PT4	5	Amman		—	—	—	M	—	?	円盤のみ
PT5	6	T. er-Rumeit		着	無	—	M	右	水平	
PT6	7	T. er-Rumeit		着	無	—	M	中下	水平	
PT7	8	T. er-Rumeit		着	無	—	M	中	垂直	両性具有
PT8	*			着	無	ローソク型冠	S	中	水平	石製

北イスラエル

番号	RK	出土地	年代 (世紀、 紀元前)	着衣	装飾	髪型	円盤 の 大 き さ	位置	持ち 方	特記事項
PN1	5.3	T. Gemmeh	不明	着	無	べール	L	中	水平	
PN2	6.1	Megiddo	11	着	無	おさげ	M	中	水平	
PN3	6.2	Megiddo	8-7	—	—	おさげ	?	—	?	
PN4	6.3	Megiddo	不明	—	—	?	—	—	—	
PN5	6.4	Megiddo	不明	—	—	おさげ	—	—	—	
PN6	6.5	Megiddo	8-7	—	—	おさげ	—	—	—	
PN7	6.6	Megiddo	不明	—	—	おさげ	—	—	—	
PN8	*	Samaria		着	無	—	M	中	水平	
PN9	*	Samaria		着	無	—	?	中	水平	
PN10	*	Samaria		着	無	—	M	右	水平	

円盤を持った女性土偶—その性格と機能

南ユダ

番号	RK	出土地	年代 (世紀、 紀元前)	着衣	装飾	髪型	円盤 の 大 き さ	位置	持ち 方	特記事項
PS1	118	Ramat Rahel	7?	—	—	鳥形	L	中	水平	
PS2	179	T. e-Nasbeh	8-7?	着	無?	—	M	中	水平	
PS3	312	Jerusalem	8	着?	?	—	?	?	?	
PS4	359	Jerusalem	不明	着	無	鳥形	M	中	水平	
PS5	360	Jerusalem	不明	着	無	—	L	中	水平	
PS6	361	Jerusalem	不明	着	無	—	M	中	水平	
PS7	384	Jerusalem	不明	着	無	—	M	中	水平	
PS8	424	Jerusalem	不明	着	無	—	—	—	—	

ておらず、一見すると典型的な第2グループのようだが、恥部には3角形の刻印がはつきりつけられており、裸体であると考えざるをえない。N7 (図1d) も着衣で、装身具が少なく、ベールをかぶっているが、円盤は第1グループのように中型のものを右胸に持っている。円盤の大きさは相対的なものではあるが、こうした中間型が存在することは、これらのグループが

明確に独立した型式と認識されていなかったことを示していると言えるであろう。

第2の理由は、たとえ円盤が比較的小型で中央に構えている場合でも、円盤を両手で均等に持っているものは少なく、やはり片手で下部を支え、もう片方の手は段違いに中央においているものがかなりある (T9 「図1e」、N11、N12) ことである。これまで、このような構え方はタンバリンを打っているように見えるという議論がしばしばなされてきた。筆者もそれに同意するが、それだけでなく、もしこれがパンであるなら、このような持ち方は考えにくいという否定的な議論も可能であろう。つまり、通常パンを持つ時には下からあるいは両側から両手で支えるのが自然であって、片手で持つとは考えにくい。特に中央においた右手は何の役も果たしていない。もしこの解釈が正しいとすると、たとえ円盤が小さい場合であっても、それはパンではなくタンバリンと考えられるべきで、サイズに大小のバリエーションがあったということになる。

第3の理由は、キールとユーリンガーが指摘している通り、パレスチナの女性土偶は時代とともに裸体から着衣へと変化していった可能性があることである。今回の



図 1

N 4

P. Beck, "A Figurine from Tel 'Ira", *EI* 21 (1991), p. 90, Fig. 10.

T 2

R. Kletter, *The Judean Pillar-Figurines and the Archaeology of Asherah*, (Oxford, 1996), p. 93, Fig. 11. 1.

N 14

M. Kochavi, "Tel Aphek", *IEJ* 26(1975), Pl. 11c.

N 7

O. Keel and C. Uelinger, *Gods, Goddesses, and Images of God in Ancient Israel*, p. 165, Fig. 190d.

T 9

N. Glueck, *The Other Side of Jordan*, (New York, 1945), p. 153, Fig. 83.

カタログは、年代不詳のものが多く十分役に立つとは言えないが、それでも全体として裸体のものは前11-9世紀から出土したものが多く、着衣のものは前8-7世紀以降のものが中心だという傾向は見る事ができる。さらに、後期青銅器時代の女性像の大半は裸体であるのに対し、ペルシャ時代の土偶はほとんど完全に着衣のものだということも、この流れを支持すると考えられる。ペルシャ時代には、妊婦等豊饒女神を表していると考えられるものでさえ着衣で描かれている。すなわち、着衣の有無はかならずしも別物を表していると考えられる必要はなく、時代による変化を反映している可能性もある。着衣だからと言って豊饒と無関係とは言えないし、裸体だからと言ってかならずしも豊饒に関係しているとは言えない。女性器が表されていても、それは単に女性であることを表しているだけかもしれない。特に円盤を持った女性像の場合、どの道左胸は円盤で隠れていて、性的特徴を強調するには不都合である。

以上の考察から、板状土偶に関して言えば、着衣や装身具の有無、円盤の大きさ、構え方等から2つの明確なサブ・グループを区別することは難しいと言えるであろう。こうした違いは、むしろ時代による表現方法の違い

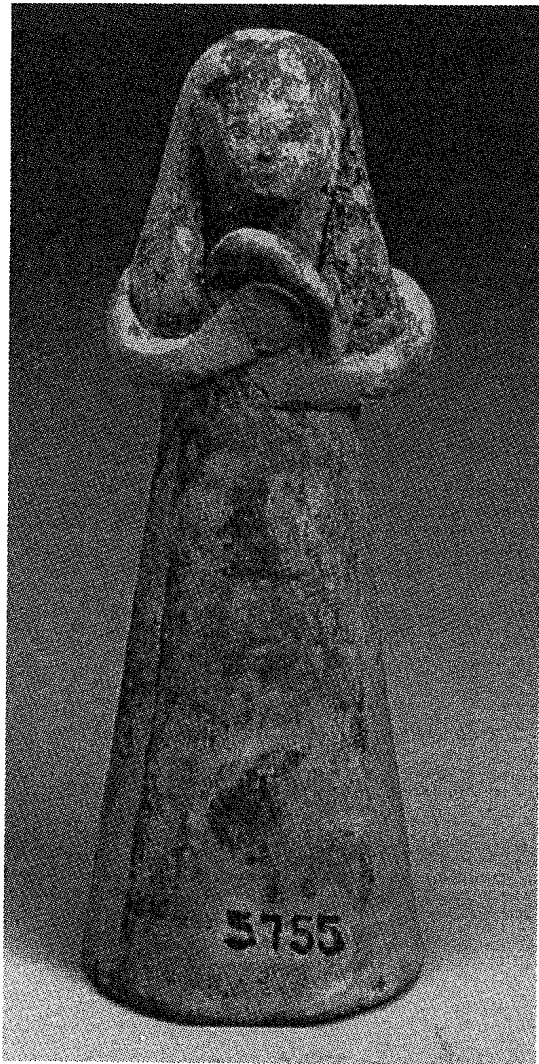
を反映しており、これらの円盤はすべてタンバリンを表していると考えられる。

(4) 柱状土偶に関する考察

次に柱状土偶に目を向けると、これらは主としてフェニキアやトランスヨルダンで作られており、北イスラエルのものは比較的少ないことがわかる。また、ユダでは身体部分が手づくねで作られたもの(ユダ式柱状土偶)が大半で、轆轤で形成された他の地域のものとは区別される。ユダのものでは子供を抱いたものはいくらか見られるが、円盤を持ったものは極端に少ない。このことは、最近発表されたエルサレム、ダビデの町の発掘で見つかった土偶の研究でも確認されている⁽⁴⁰⁾。

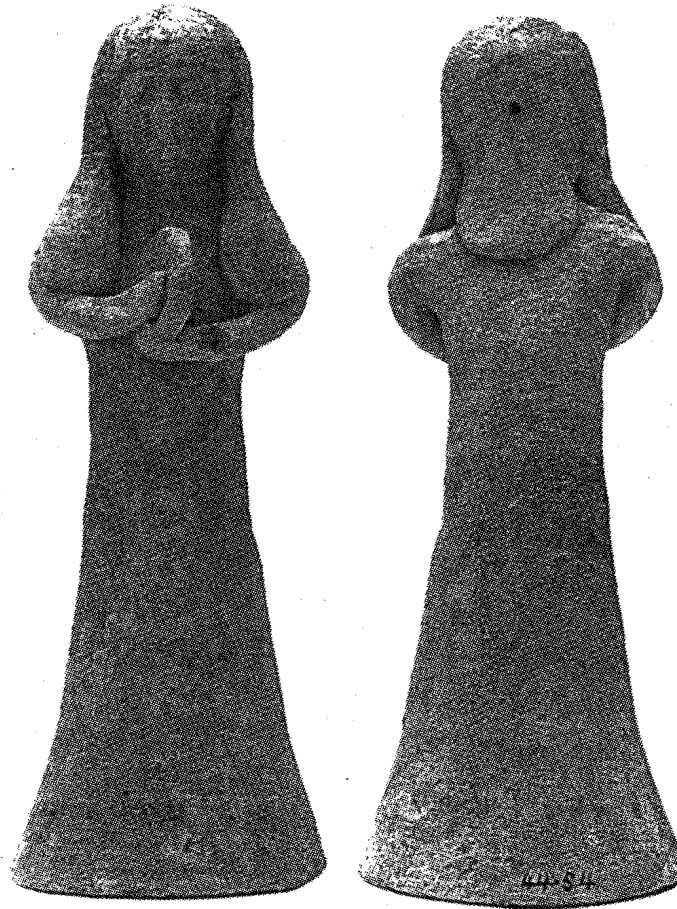
これら柱状土偶で円盤を持ったものは、円盤を持った板状土偶と同じものを表していると言えるのだろうか。それとも、C・メイヤーズのように区別して考えるべきなのだろうか。

まずカタログから知られることは、柱状土偶の中にも、円盤を身体に対して垂直に持ったもの(PP1、3、4、5(図2a)、6、7(図2b)、8、PT2、7)と水平に持ったもの(PP2 [図2c]、PT2、5、6、8、PN1、



2 a

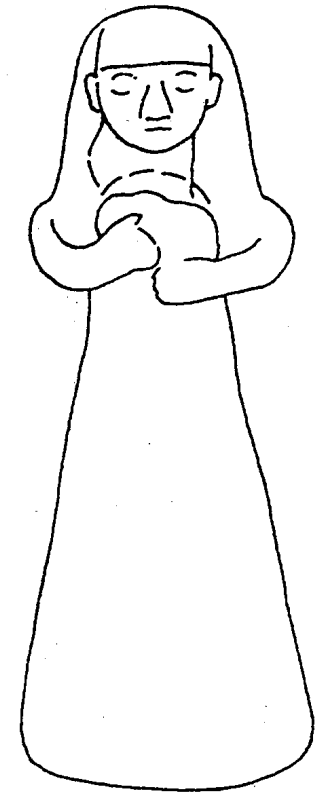
PP 5
C. Meyers, "Of Drums and Damsels : Women's Performance in Ancient Israel", *BA* 54 (1991), p. 16.



2 b

図 2

PP 7
E. Mazar, "A Horseman's Tomb at Akhziv", *Qadmoniot* 91-92 (1990), p. 108.



2 c

PP 2
R. Kletter, *The Judean Pillar-Figurines*, p. 91, Fig. 9. 2.

2、PS1、2、5)があるということである。フェニキアでは垂直のものが多く、トランスヨルダンでは半々、北イスラエルや南ユダでははっきりとしたものは水平の例しか知られていない。

この内垂直のものがタンバリンを表していることは、まず間違いないであろう。これらは明らかにタンバリンを叩く形状をしており、アシユド出土の楽士たちのついた祭儀台やキプロス出土の楽団がセットになった土偶と比べてみても、この解釈は支持される⁽⁴⁾。

一方、円盤を水平に構えたものはどうであろう。タンバリンを叩いている状態の描写としては、垂直のものに比べて現実的ではないが、それでもタンバリンを表しているとは解釈することがもつとも妥当だと思われる。私たちは、すでに板状土偶で水平に円盤に構えたものはタンバリンであると判断してきた。もしこの解釈が正しいならば、それらとほぼ同じ姿勢で円盤をかかえている柱状土偶がタンバリンを持っていることに問題はないであろう。中には円盤を身体の右側に構えている例(PT5)もあり、板状土偶との強い関連性を示している。

第2に、柱状土偶は着衣であり、装身具も少ないので、裸体で装身具の多い板状土偶と区別されるという説も、

単純すぎるであろう。板状土偶の中にも着衣で装身具の少ないものが存在し、タンバリンを持っていることはすでに指摘した。特に時代が下るにつれてその傾向が強くなり、これは柱状土偶が増加する時期と一致している。また柱状土偶の場合、着衣や装身具は刻印やはりつけでなく彩色によって表されており、それが十分に残っていない場合が多いので、柱状土偶に装身具が少ないとは必ずしも断定できない。

第3に、女性土偶の製作技法が時代とともに板状のものから柱状のものへと変化する大きな流れがあったと考えられる。もしそうなら、この違いは技術発展によるもので、必ずしも描写している対象が別物ということはない。出土年代の情報は限られているが、板状土偶が主として鉄器時代のかなり早い時期から出土するのに対し、柱状土偶はメギッドの1例(PN2)を除き、ほぼすべて9世紀以降のコンテキストから出土している。さらに板状土偶が後期青銅器時代にも作られていたことと柱状土偶がペルシャ時代のフェニキアでも盛んに作られていたことは、この傾向を支持していると言えるであろう。

(5)まとめ

以上の考察から結論できることは、パレスチナの女性土偶の持っている円盤はすべてタンバリンだということである。C・メイヤーズのように、円盤を水平に持った板状土偶と円盤を垂直に持った柱状土偶を区別する必要はない。メイヤーズは、柱状土偶にも水平に円盤をかかえるものがあることを考慮に加えていないように思われる。むしろこれらは土偶製作の時代による発展を反映していると考えられ、同じものを描写していると捉えることが妥当であろう。

この発展には、ある程度の地域差が考えられ、フェニキアがいち早く柱状土偶を取り入れたのに対し、北イスラエルはなかなか板状土偶から抜け出せなかった。トランスヨルダンは、その中間に位置している。南ユダでは、円盤を持った女性土偶自体ほとんど作られなかった。一覧表にしてみると、以下(表3)のようになる。

円盤を持った女性土偶は、最初円盤を水平に構えた板状土偶として登場するが、次第に柱状土偶で円盤を垂直に構えるものへと変化していく。板状のものでも、最初は身体の右側に円盤を構えていたものが、次第により小さな円盤を中央に構えるようになる傾向があった。柱状

円盤を持った女性土偶—その性格と機能

表3：円盤を持った女性土偶の地域分布

	フェニキア	トランスヨルダン	北イスラエル	南ユダ
板状		○	○	△(少)
柱状(水平)	○	○	○	△(少)
柱状(垂直)	○	○		

土偶で円盤を水平に構えているものは、板状土偶と柱状土偶の中間型とみなすことができるであろう。これらの変化は、明確に区別されたサブ・カテゴリーを形成しているとは言えず、すべて同じものを異なった技術と表現方法で表していると考えべきであろう。⁽⁴²⁾

もし女性土偶の持っている円盤はすべてタンバリンであるという上述の説が正しいとするなら、この円盤がパンであるという説のために示されてきた証拠はどのように考えるべきであろうか。

まずカリカンが紹介しているツロ近郊出土のパンを女神に捧げる礼拝風景を描いた模型であるが(図3)、⁽⁴³⁾礼拝風景の模型と女性土偶ははつきりと区別されるべきであろう。たしかにこの模型はパンを女神に捧げる儀式が存在したことを示していると



図3：パンを捧げる神殿模型

W. Culican, "A Votive Model from the Sea", *PEQ* 108 (1976), Pl. XII A.

思われるが、だからと言ってパンを持った女神像が作製されたことの証拠にはならない。実際この模型で描かれているパンはかなり大きく、女性土偶の持っている円盤の大きさとは異なっている。⁽⁴⁴⁾ また、このパンは複数の礼拝者が持つているように描かれており、女神が持っている訳でもないし、礼拝者が一人で持っている訳でもない。当然持ち方も女性土偶の場合と大きく異なっている。女性土偶が女神を表現しているにせよ、それに仕える巫女か礼拝者を表しているにせよ、この模型の中に女性土偶と同じような形で円盤を持っている人物は存在しない。

マリ出土のパンを焼くため

に用いられたと考えられる型についても、同様なことが指摘できる。⁽⁴⁵⁾これらのパン型が天の女王の礼拝に用いられたとしても、だからと言ってそれを持った女神やその礼拝者の像が作られた証拠にはならない(図4)。しかも、型の1つに描かれた女性像は円盤を持っていない裸婦像であり、天の女王がパンを持って描かれていたという主張とは合致しない(図5)。⁽⁴⁶⁾

さらに、天の女王と一般に結びつけられているイシュタルやアシュタロトについて見るならば、パンを持った姿で描かれている例は今のところ知られていない。むしろ画像学的には、星が描かれていることが多く、若干ではあるがタンバリンを持っていない例も知られている(図6)。⁽⁴⁷⁾天の女王にパンを捧げる儀式が存在したというただけから、画像学的に天の女王がパンを持つように表したとすることには無理があるであろう。

三 タンバリンの用法

(1)イスラエル王国時代におけるタンバリンの用法

前節で私たちは円盤を持った女性土偶をカタログ化し、型式学的に分析し、円盤は一貫してパンではなくタンバリンとみなすべきだとする結論に達した。本節では、こ

のタンバリンを持った女性土偶の性格について検討したい。

イスラエルの王国時代にタンバリンがどのような役割を持っていたかは、当時の社会状況をもっとも詳しく記している旧約聖書に反映されていると考えられる。ここでは、タンバリン(手打ち太鼓)を表すヘブライ語 **טביל** の旧約聖書における用例をコンコルダンス的に調べ、タンバリンが使用された「生活の座(Sitz im Leben)」を明らかにしていきたい。⁽⁴⁸⁾

טביל は旧約聖書中全部で17回用いられており、その用法を一覧表にすると以下(表4)のようになる。

טביל は、エゼキエル書28・13で笛とともに宝物の一つとして数えられているが、それ以外の用法は大きく3つに分類することができる。礼拝、酒宴、凱旋の場面である。

礼拝は宗教儀式であり、酒宴は世俗的な楽しみ、友好の場であるが、それぞれに音楽を伴っていたことが知られる。礼拝でも酒宴でもタンバリンは必ず他の楽器と一緒に記されており、楽団の一部として用いられていたことがわかる。(表の+は他にもう一つの楽器が記されて

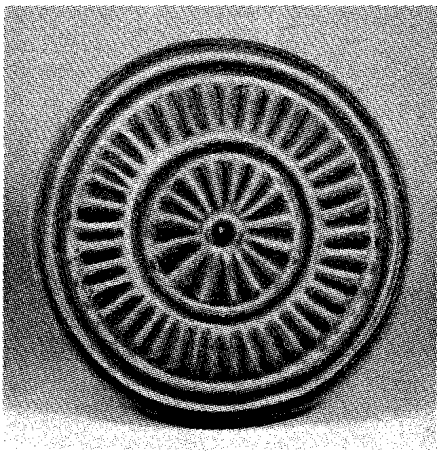
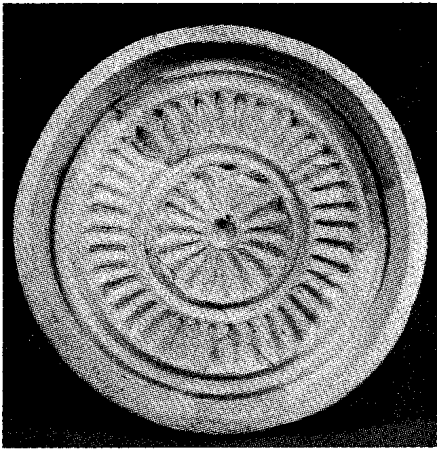


図4：マリ出土のパン型(I)
「古代シリア文明展」(東京新聞，中日新聞，1977年)，図74.

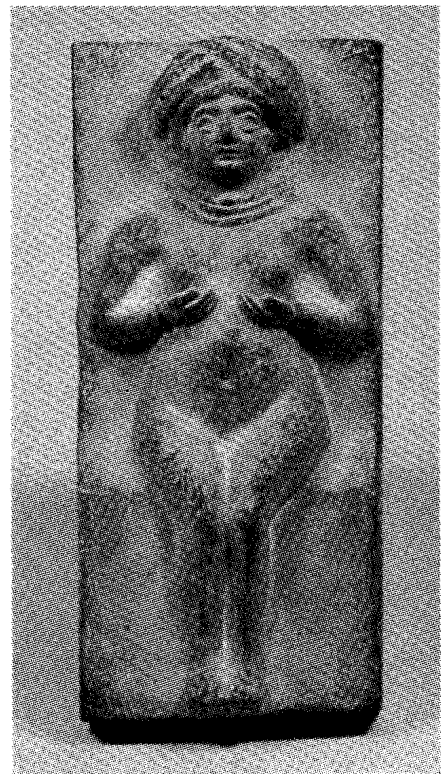
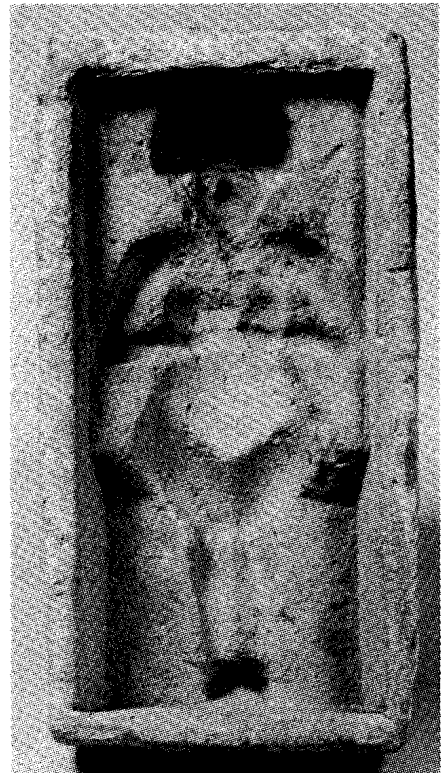


図5：マリ出土のパン型(II)
「古代シリア文明展」，図79.

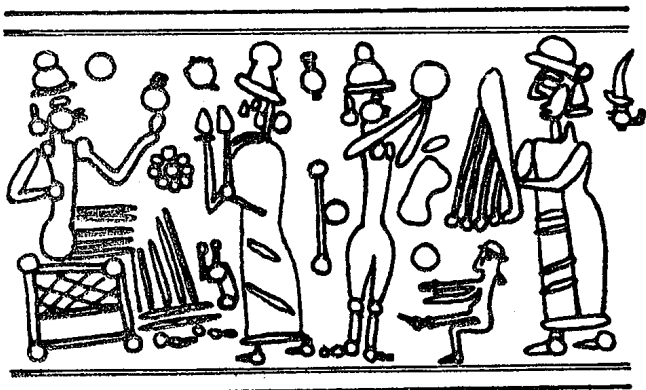


図6：タンバリンを持ったイシュタールが描かれている円筒印章

D. Collon, *The Alalakh Cylinder Seals*, (BAR International Series 132), (1982), p. 74, no. 47.

表4：叩の用法

カテゴリー	聖書箇所	他の楽器の有無	主 語
宝 物	エゼ 28 : 13	+	
礼 拝	詩 149 : 3 詩 150 : 4 詩 81 : 3 Iサム 10 : 5 IIサム 6 : 5 I歴 13 : 8	+	
酒 宴	イザ 5 : 12 創 31 : 27 ヨブ 21 : 12 イザ 24 : 8	++ + ++ +	
凱 旋	出 15 : 20 出 15 : 20 士 11 : 34 Iサム 18 : 6 エレ 31 : 3 詩 68 : 26 イザ 30 : 32	- - - + - 楽人 +	ミリヤム 女たち エフタの娘 女たち おとめイスラエル おとめ

円盤を持った女性土偶—その性格と機能

いる場合、++は他に2つ以上の楽器が記されている場合である。またタンバリンを演奏していた人物を表す主語は、一度も明示されていない。

一方、凱旋の場面は、すべて戦争に勝って帰ってきた兵士たちを女たちがタンバリンを打って出迎えたという記事である。これらの情景では、基本的にタンバリンは単独で用いられており、他の楽器が並記されている場合でも1つだけである。主語はほとんど常に女性であることが明記されている。凱旋兵士を迎える時には、タンバリンを持った女たちが歌い踊ることが習慣化されていたことが容易に想像される。

こうした用法の少し特殊な例として、イザヤ書 30・32 と詩篇 68・26 を挙げるができる。イザヤ書 30・32 は、主がアッシリア帝国を滅ぼされることの預言であるが、主がタンバリンと立琴に合わせて勝利を取られることが語られている。ここでは特定の戦いからの凱旋が語られているわけではなく、勝利を取るのも凱旋兵士ではなく主御自身である。タンバリンを叩くのも誰だか特定されていない。しかし、この場合でも、タンバリンは勝利を表すものとしてシンボリックに用いられており、このような表現の背後に戦勝の祝いで女性がタンバリンを叩く

習慣があったことが前提とされていたことが容易に想像される。

詩篇68・26では、神がイスラエルの敵に勝利されることが歌われており、聖所に向かう行列の先頭に歌う者、最後に楽人、その間におとめたちがタンバリンを叩いていくことが記されている。この場合も特定の凱旋行進ではなく、より一般的に主の勝利を祝う礼拝行為が描かれていると考えられる。そのため、ここには礼拝の要素と凱旋の要素が両方存在しているが、それでもこれら2つの要素は独立したものとして区別することができる。すなわち公式の礼拝として大規模な楽団が用いられていたことが記されているだけでなく、その中央でおとめたちがタンバリンを叩いていたことが特記されていることは、この行為が何らかの意味で凱旋を意味していたからであろう。明らかに彼らは楽団（楽士たち）の一部とはみなされていない。

これら2つの例は、凱旋兵士を女性たちがタンバリンを持って出迎えるという特定の場面を描写したものであるが、そのような習慣がすでに十分確立されていたので、もう一步発展させてこのようなシンボリックな用い方も可能になったのであろう。

こうしたことから、礼拝、酒宴の時のタンバリンの用法と凱旋の時のタンバリンの用法はまったく性格の違うものであることが明らかである。礼拝、酒宴の場合には、タンバリンも用いられたが、それは楽団の一部としてであり、演奏者も女性に限定されていない。キールとユーリンガーは、カラフ出土の楽団を描いた象牙製小箱等の例(図7)から、楽団には通常女性のタンバリン奏者がいたと主張しているが、楽団を描いたものの中には、アシユドト出土の祭儀台(図8)など、男性がタンバリンを叩いている例も少なくない。⁽⁴⁹⁾ 少なくとも聖書は、楽団の演奏者



図7：象牙製小箱に描かれた楽団

U. Winter, *Frau und Göttin* (OBO 53), (Freiburg, 1983), Fig. 259.

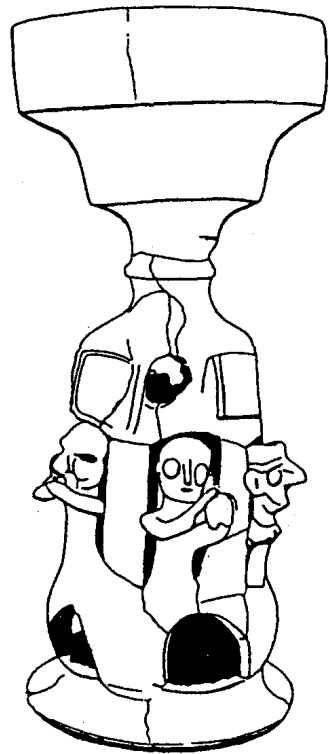


図8：アシュドド出土の祭儀台
Keel and Uelinger, *Gods, Goddesses, and Images of God*, p. 124, Fig. 149b.

の性別や特徴を一切記していない。しかし、凱旋の場合には、演奏家が女性であることが必ず強調され、楽団ではなくタンバリンという特定の楽器に焦点が当たっている。イスラエルの王国時代に、女性がタンバリンを叩くことと凱旋の喜びが関連づけられていたことは明白であろう。タンバリンは、打楽器としての特性から熱狂的な宗教(豊饒)祭儀と結びつけられて論じられることも多い。⁽⁵⁰⁾しかし、聖書には正統的であれ異教的であれ、礼拝活動とタンバリンを特別に結びつけている箇所は存在しない。

(2) タンバリンを持った女性土偶と戦勝祈願

このような社会環境の中で考える時、この種の土偶と戦勝祈願あるいは感謝が関連していたと考えることは最

円盤を持った女性土偶—その性格と機能

も自然な結論であろう。とりわけタンバリンを持った女性土偶が楽団の一部としてでなく、単独で大量に見つかっていることはその可能性を示している。タンバリンを持った女性土偶は、タンバリンを胸の上に構えており、生殖機能や性的特徴を強調していないものが多い。またすでに見たように、時代とともに女性土偶は裸体のものから着衣のものへと変化したようであり、裸体のもものがすべて豊饒女神とされなければならないわけではない。⁽⁵¹⁾乳房や生殖器は単に女性であることを意味しているだけの可能性も十分にあり、この種の土偶を熱狂的な豊饒祭儀とむすびつけなければならぬ積極的な理由は存在しない。

また、この聖書資料の分析は、C・メイヤーズが主張するように垂直に円盤を構えるものと水平のものを区別する必要がなく、円盤を持った女性土偶は一貫して戦勝祈願と関わりがあったと考えなければならないことを示している。⁽⁵²⁾円盤を垂直に持った柱状土偶はフェニキアを中心に見れば、トランスヨルダンにもいくらか出土例があるが、北イスラエルや南ユダではほとんど知られていない。⁽⁵³⁾しかし、メイヤーズは、イスラエルの状況を描いた旧約聖書の記述をもとにタンバリンを持って凱旋兵士を

出迎える習慣があったことを示しており、このままでは地域的なずれがあると言わざるを得ない。こうした習慣があったと明記されている北イスラエルや南ユダにはこの種の土偶があまり発見されておらず、そういった習慣の存在を文献資料で確認できないフェニキアでこの種のものが大量に作られたことになるからである。しかし、私たちは前節で円盤を持った女性土偶はすべてタンバリンを持っていると解釈されるべきことを見てきた。もしこれらの土偶が実際上同じものであり、表現方法が違うだけであるなら、聖書の記述と土偶の存在に一貫性を見ることができるようになる。こうした習慣は、聖書に記されている通り、イスラエル・ユダにも存在し、その隣接地域にもあったのである。

イスラエルの王国時代は、南北イスラエルの争い、アラムとの戦い、大国アッシリア、バビロニアの脅威と次々に戦争の起こった時期である。国内的にも、北イスラエルは二〇〇年ほどの存在期間に9つの王朝が変わり、19人の王が立つような落ち着かない状況だった。こうした時期に戦勝祈願の土偶が大量に作られたことは十分に考えられることであろう。

四 タンバリンを持った女性土偶の定義に向けて

これまでの考察の結果、円盤を持った女性土偶はすべてタンバリンを持っているとみなされるべきこと、何らかの意味で戦勝祈願と関係している可能性が高いことの2点が明らかになった。ここではこの2点を踏まえて、これらの土偶をより厳密に定義づけていきたい。これらは人間の女性を表したもののなか女神を表したもののなか、もし女神としたら、これまで知られているさまざまな女神とどういう関係にあるのかをできる限り検討していきたい。

(1) タンバリンを持った女性土偶と人間の女性

まず、これらの女性土偶は、女神を表しているのだろうか人間女性の女性を表しているのだろうか。C.メイヤーズは、身体に垂直に円盤を構えるタイプのもののみがタンバリンを持っていると主張したが、これらは着衣で装身具も少ないことから、人間の女性で凱旋兵士を出迎える儀式と関連していると主張した。⁽⁵⁴⁾ 本稿では、円盤を垂直に構えるものと水平に構えるものの区別はすべきでなく、すべてタンバリンだという見解を採用したが、メイ

ヤーズの垂直タイプの立場を拡大し、すべて人間の女性を表しているとすることは可能かもしれない。キールとユーリンガーは、垂直、水平タイプの区別をせず、この時期（鉄器時代第ⅡA期）には神像を直接描くこと自体が減少する傾向にあるので、人間の女性を描くことによつて戦争の女神に対する祈りを間接的に表現した可能性を指摘している。⁽⁵⁵⁾

聖書本文を見ると、タンバリンを持っていたのは人間の女性であり、女神ではない。この儀式が特定の女神と結びついていても示されていない。またイスラエル人が戦勝を祈った対象が、聖書の正統的信仰の通り主であつたとするならば、当然この女性土偶は女神の像ではなく、人間の女性でなければならない。

しかし、人間に願をかけることがこの時代のイスラエルに存在したことは、聖書資料からも考古資料からもまったく知られていない。こうした可能性があることは理論上否定できないが、積極的な証拠もないとせざるをえないであろう。

さらに、主を唯一絶対の神とする聖書の立場とは違い、実際にはイスラエルにおいてアシエラ、アシユタロト、バアルなど複数の神々を主と並行して礼拝する相對主義

的立場がかなり一般化していたことは、さまざまな考古学的発見からすでに知られている。⁽⁵⁶⁾もしそうだとするならば、これらの女性土偶が女神を表していることも十分ありえる。聖書はこうした偶像崇拜を示す要素を抑えてしまったのかもしれない。

もちろんこれらが女神崇拜と関連していたとしても、描かれているのはその祭儀に関連した人間（礼拝者、巫女等）という可能性もある。しかし、その場合でも、戦勝を導く力は神から来るのであり、人間はあくまで祈る側である。おそらく礼拝する人間も何らかの意味で、この女神の属性に関係する要素を礼拝の中に反映させていたと考えるべきであろう。

実際近隣諸国では、イシユタールがタンバリンを持って描かれている図像はいくつか知られているし、アナトリアの豊饒女神キュベレはいつもタンバリンを手にして描かれており、女神がタンバリンを持って描かれること自体は珍しくない。キュベレとアナト、アシユタロトとの間に何らかの関連があつたこともすでに指摘されている。⁽⁵⁷⁾また、ユダでは豊饒祭儀のためにアシエラ土偶が用いられていたことが認められており、戦勝祈願についても同じような民衆の願掛けと女神の関係があつたとして

も不思議ではない。

現状では、この女性土偶が人間を表していた可能性を完全に否定することはできないが、その可能性は低いと言わざるを得ない。断定はできないが、これらの土偶の背後に何らかの女神が想定されていた可能性を探ってみることは有意義であろう。

(2) タンバリンを持った女性土偶とアナト

もしこれらが女神像あるいはそれに関連した像であると仮定するなら、どの女神がもつとも可能性が高いだろうか。聖書やウガリト文書によると、古代パレスチナではアナト、アシエラ、アシエラの3柱の女神が広く礼拝されていたことがよく知られている。⁽⁵⁸⁾

まずアナトであるが、ウガリト神話テキスト(前14世紀頃)では、激しい性格の戦争を司る処女神として描かれている。しかし、これらの土偶が出現する前一千年紀にはもはやあまり礼拝されていなかったように見受けられる。旧約聖書には、アナトという言葉が2回用いられているが、それらは女神そのものを指しているわけではなく、「ベン・アナト(アナトの息子)」といった表現で「勇士」を意味する慣用句として用いられていたと思わ

⁽⁵⁹⁾れる。おそらくアナトが戦争の女神であったという記憶はあったであろうが、すでにアナト崇拜そのものは前一千紀にはすたれていたか下火になっていたようである。⁽⁶⁰⁾もしそうだとすると、アナトはこの女性土偶の示しているものの候補としてはふさわしくないと考えるであろう。図像学的にもアナトは馬にまたがり、武器を手にした形で描かれることが多く、タンバリンを持った女性像との違いは顕著である。

(3) タンバリンを持った女性土偶とアシエラ

次にアシエラであるが、ウガリト神話では主神エルの配偶神、旧約聖書ではバアルと対で描かれている。⁽⁶¹⁾ヒルベツト・エル・コムやクンティレット・アジュールツ出土の碑文に「ヤハウエとそのアシエラ」という表現があることから、聖書に現れないユダの非正統的信仰ではヤハウエの配偶神と考えられていたともしばしば論じられている。⁽⁶²⁾アシエラは生命の木や女性器によってシンボリックに表現されることが多く、豊饒を司る地母神と考えられていた。

豊饒祭儀に音楽を用いた熱狂的な要素があったことは大いに多いにありえる。キュベレ祭儀等では、むしろそ



図9：ユダ式柱状土偶

R. Kletter, *The Judean Pillar-Figurines*, p. 86, Fig. 4. 2.

れが特徴とされている。しかし、旧約聖書では礼拝行為に常に楽団が用いられていたことが記されており、タンバリンだけを特に強調することはなされていない。またアシエラは基本的に豊饒神であり、戦争との繋がりは強くない⁽⁶³⁾。もしタンバリンが戦勝祈願と関わりがあったという解釈が正しいとするなら、それを持った女性像がアシエラである可能性は低いであろう。

アシエラは主として南ユダで礼拝されていたことが指摘されているが、タンバリンを持った女性像の多くはそ

れ以外の地域から出土している。ユダ出土のものは、円盤が極端に大きいものなど特殊なものがいくつもあるだけである。鉄器時代第Ⅱ期以降のユダからはユダ式柱状土偶と呼ばれる乳房を強調した土偶が大量に出土しており、これがアシエラを表しているという説が強い⁽⁶⁵⁾(図9)。もしこの説が正しいなら、円盤を持ったものはアシエラ以外のものを表していると考えるのが自然であろうし、それらがユダ以外の地域でより多く見つかる状況とも合致する。

(4) タンバリンを持った女性土偶とアシユタロト

アシユタロトは、タンバリンを持った女性像と関連する可能性がもつとも高い。元来アシユタロトは金星の神で、戦争を司っていた⁽⁶⁶⁾。メソポタミアのイシュタルとも関連がある。イシュタルは、通常頭上や身体の周囲に星の輪を持った女性として描かれており、パレスチナでも印章などではそのように表現されていた⁽⁶⁷⁾。しかし、メソポタミアではイシュタルがタンバリンを持って描かれる場合もあるので、パレスチナでタンバリンが強調されるようになったとしても不思議ではない⁽⁶⁸⁾。

アシユタロトは戦争を司る神であり、前一千年紀のパ

レスチナで礼拝されていた。これらの土偶が女神そのものを表しているかその礼拝者を表しているかははっきりしないが、もしタンバリンを持った女性が何らかの意味で戦勝祈願と関わっていたとするなら、アシユタロトはもつともそれに近い存在である。アシユタロトがフェニキアを中心に主として北部地域で礼拝されていたことを考えると、このタンバリンを持った女性像の分布ともよく合致する。⁽⁶⁹⁾ 北部地域では、タンバリンを持った女性像は戦争の女神（あるいはその礼拝者）、裸体や妊娠を強調した女性像は豊饒神（あるいはその礼拝者）を表していたと考えてよいのではないだろうか。

エレミヤ書に出てくる「天の女王」も、アシユタロトかメソポタミアから輸入されたイシュタール、あるいはその2つが融合したものと一般に考えられている。⁽⁷⁰⁾ もしそうであるなら、ユダから若干出土している円盤を持った女性土偶はこれを表しているのかもしれない。ユダではアシユタロト崇拜は一般的でなかったが、王国末期になつて少し変わった形で導入されたのであろう。もちろん、これらの女性土偶の持つている円盤はパンでなくタンバリンだと考えられるべきであろうが、天の女王はパンを捧げられたというだけでなく、戦争の女神としてタ

ンバリンとの関わりもあつたと思われる。⁽⁷¹⁾

(6)まとめ

以上の研究をまとめてみるなら、円盤を持った女性土偶は美と戦争の女神アシユタロトと関係している可能性がもつとも高く、アナトやアシエラはあまり条件に合わないと言ふことができるであろう。一般民衆の多くは、公式の礼拝とは少し違った形で、タンバリンを持った女神かその礼拝者を通して戦勝を祈願したものと考えられる。

W・ディーバーは、鉄器時代も時代が下るにつれて、アシエラ、アシユタロト、アナト等の女神が混合して1つの女神のようになり、それらを区別することは難しいことを主張している。⁽⁷²⁾ ヘレニズム時代のアタルガティスやキュベレには、元来異なった女神のさまざまな要素が流れ込んでいふと言ふ。しかし、旧約聖書自身はこれらの女神を別個の存在として区別しており、まだ1つに融合した形では描いていない。たとえ後に融合していくことになつたとしても、元来これらは別々の神で、役割も異なつていた。本稿で扱っているイスラエル王国時代の人々は、これらの女神の違いを十分意識していたと考え

てよいであろう。

五 結論

これまで私たちは、パレスチナから出土する円盤を持った女性土偶の性格と機能について調べてきた。

第二節では、さまざまな円盤を持った女性土偶のカタログを作り、分類を試みたが、これらはすべて同じタンバリンを持つ女性像を表していると結論づけられた。円盤の大小、位置、着衣の有無、柱状・板状の違いといった各要素の組み合わせは均質なサブ・グループを形成していないので、すべて1つのカテゴリーのバリエーションと考えるべきだと思われる。この内円盤を身体に垂直に構えたものはタンバリン以外に考えられず、水平のもの大半の構え方もパンとしては無理があるので、すべてタンバリンと考えるべきだとした。

次に第三節では、聖書中のタンバリンの用例をコンコルダンス的に調べた。タンバリンには主として2つの用例があり、礼拝や祝宴では楽団の一部として演奏され、凱旋兵士を出迎える場面では基本的に女性がタンバリンを単独で用いたことが明らかになった。後者の用法はかなり習慣化しており、タンバリンを持った女性土偶と凱

旋を結びつけることはきわめて自然である。タンバリンを持った女性土偶によって戦勝の願をかける行為自体は記されていないが、そのような異教的要素が意図的に聖書で排除されたとしてもまったく不思議ではない。逆に熱狂的な宗教祭儀とタンバリンが特別に結びつけられた聖書箇所は1箇所もない。

第四節では、第二節、第三節の結果に基づいて、この女性土偶の同定を試みた。これらが人間の女性像であつて、それを通して戦勝を祈った可能性も否定できないが、人間の像がそのような形で用いられたという根拠はまったく存在しない。もしこれが女神崇拝と関連するならば、その女神はアシタロトである可能性が一番高い。アナト崇拝は前一千年にはすでにすたれていたと考えられ、アシエラは基本的に豊饒神で戦争を司る神ではないからである。アシタロトは美と戦争の女神であり、その信仰がパレスチナ北部を中心としていたこともこの土偶の分布と一致している。若干ではあるが、図像学的にもアシタロトとタンバリンの結びつきは示されている。

このような習慣がいつからあつたのかは推測の域を出ないが、これらの土偶は前11世紀頃に登場し始め、イスラエルの分裂王国時代に盛んに作られたことが知られて

いる。南北イスラエルやその隣国が、アッシリアや新バビロニアといったメソポタミアの大国の脅威にさらされるようになるにつれ、戦勝祈願の思いが強まっていたことは容易に想定できることである。

註

(1) 土偶全般に関する研究史は、R. Kletter, *The Judean Pillar-Figurines and the Archaeology of Asherah* (BAR International Series 636), (Oxford, 1996), pp. 10-27 に註じよ。
 (2) E. Pilz, "Die weiblichen Gottheiten Kanaans", *ZDPV* 47 (1924), pp. 131-168.
 (3) ねんねね J. B. Pritchard, *Palestinian Figurines in Relation to Certain Goddess known through Literature* (AOS 24), (New Haven, 1943); T. A. Holland, *Typological and Archaeological Study of Human and Animal Representations in the Plastic Art of Palestine*, Ph. D. Thesis, (Oxford University, 1975); J. R. Engle, *Pillar Figurines of Iron Age Israel and Asherah/Asherim*, Ph. D. Thesis, (Pittsburgh University, 1979); R. Kletter, *The Judean Pillar-Figurines*.
 (4) D. Gilbert-Peretz, "Ceramic Figurines", *City of David IV* (Qedem 35), (Jerusalem, 1996).
 (5) A. J. Amr, *A Study of Clay Figurines and Zoomorphic Vessels of Transjordan during the Iron Age, with Special Reference to Their Symbolism and Function*, Ph. D. Thesis, (University of London, 1980).

(6) M. D. Fowler, "Excavated Figurines: A Case for Identifying a Site as Sacred?" *ZAW* 97 (1985), pp. 333-344.
 (7) Mary M. Voigt, *Hajji Firuz Tepe, Iran: The Neolithic Settlement* (Hasanlu Excavation Reports, Vol. 1), (Pennsylvania, The University Museum, 1983). R. Kletter, 前掲書 110-111、211-212頁の議論参照。
 (8) M. Tadmor, "Female Cult Figurines in Late Canaan and Early Israel: Archaeological Evidence", T. Ishida ed. *Studies in the Period of David and Solomon and Other Essays* (First International Symposium for Biblical Studies 1979), (Tokyo, Eisenbrauns, 1982), pp. 139-173. ヌトトナー (U. Hübner, "Das Fragment einer Tonfigurine von Tell el-Milh, Überlegungen zur Funktion der sog. Pfeilerfigurinen in der israelitischen Volkreligion", *ZDPV* 105 [1989], pp. 47-55) をたまたま土偶に關して同様な主張をしようとする「同時代にわたる家庭礼拝の神像」とも、*あそびやしらべ* 92-97の「あそびやしらべ」に關して「回響集」*Spiel und Spielzeug im Antiken Palastina* [OBO 121], [Freiburg, Universitätsverlag, 1993], pp. 92-97) の「あそびやしらべ」を参照せよ。
 (9) R. De-Vaux, *Les institutions de l'Ancient Testament*, CERF (Paris, 1958), p. 82; U. Hübner, *Spiel und Spielzeug*, pp. 92-97. ヌトトナーの問題は以上と同じ。註を参照。その他動物土偶に關しては、その立場を取る者(例へば、K. M. Kenyon, *Digging Up Jerusalem*, [New York and Washington, Praeger, 1974], p. 142) をさへ、その立場を無視するものがある。

(10) 例えば、前述のカタログを作ったピルツ、プリツチャード、ホランド、エンゲル、クレッターは、それぞれこの見解がある。

(11) 初期の民俗学の例としては、J. Frazer, *The Golden Bough*, (London, 1890)等を参照。魔術は人間が自然の力や霊の力を利用して自分の願いを成就させるものであるのに対して、宗教は超越的な神が倫理や神学について啓示を与えるものであるとどうも対立的に捉えられることが多かった。より最近の立場に関しては、J. Skorupski, *Symbol and Theory: A Philosophical Study of Theories of Religion in Social Anthropology*(Cambridge University Press, 1976); R. K. Rimer, *The Mechanics of Ancient Egyptian Magical Practice* (Chicago, 1993); F. A. M. Wiggermann, *Mesopotamian Protective Spirits: The Ritual Text*, (Groningen, Styx, 1992)等参照。

(12) エンゲル、クレッターに関しては、それぞれ註①、註②の文献参照。その他、以下の研究でもトヌ式柱状土偶はアンホルムホルツ等。J. S. Holladay, "Religion in Israel and Judah Under the Monarchy: An Explicitly Archaeological Approach", P. D. Miller, et al. eds. *Ancient Israelite Religion*, (Fortress, 1987)所収; W. G. Dever, "Archaeology, Material Culture and the Early Monarchical Period in Israel" D. Edelman, ed., *The Fabric of History*, (SOTS 127), (Sheffield, 1991)所収; R. Hestrin, "The Lachish Ewer and the Asherah", *IEJ* 37 (1987), pp. 212-223; 同著者 "Understanding Asherah", *BAR* 17 (1991), pp.50-59; O.

Keel and C. Uehlinger, *Gods, Goddesses, and Images of God in Ancient Israel*, (Minneapolis, 1996), pp. 331-332 (エヘン語による原著者たち *Göttinnen, Götter, Gottessymbole*, [Freiburg, 1992])等。

(13) 旧約中のマシハトに関する研究としては、特に W. L. Reed, *The Asherah in the Old Testament*, (Fort Worth, Texas Christian University Press, 1949)と R. Patai, *The Hebrew Goddess*, (New York, Ktav, 1967)。「ヤンホルムホルツの神文に関する研究は数多くの研究がなされてきたが、代表的なものには以下の通り。ヌマヤン・ホル・ロムゴウラ、J. Naveh, "Graffiti and Dedications", *BASOR* 235 (1979), pp.27-30; A. Lemaire, "Les inscriptions de Khirbet el-Qôm et l'Asherah de YHWH", *RB* 84 (1977), pp. 595-608; J. M. Hadley, "The Khirbet el-Kôm Inscription", *VT* 37 (1987), pp. 50-62. アンホルム・マシハトの神像 und seine Aschera", *Anthropomorphes Kultbild in Mesopotamien, Ugarit und Israel. Das biblische Bilderverbot*, (Münster, Ugarit Verlag, 1992), 所収; J. M. Hadley, "Quantlet 'Ajrud : Religious Center or Desert Way Station?" *PEQ* 125 (1993), pp. 115-124; A. Lemaire, "Déesses et dieux de Syrie-Palestine d'après les inscriptions (c. 1000-500 Av. N. E.)", W. Dietrich and M. A. Klopfenstein, eds. *Ein Gott Allein?* (OBO 139), (Freiburg, Universitätsverlag, 1994) 所収, 148頁以下。

(14) 板状土偶に関しては、M. タドモルが研究を行った

- (註の参照)が、その結果について広く合意が得られてくる
よう記すべき。
- (15) R. Amiran, "A Note on Figurines with 'Disks'", *Eretz Israel* 8 (1967), pp. 99-100 (クブライ語)。
- (16) 例えば、小板橋又久「古代オリエントの音楽—ウガリ
トの音楽文化に関する一考察」(リットン、1998) 75-76
頁参照。
- (17) D. R. Hillers, "The Goddess with the Tambourine",
Concordia Theological Monthly 41 (1970), pp. 606-619. ヌ
トースト、ム・ラントのソロ田の解釈 (P. Lapp, "The
1966 Excavations at Tell Ta'annek", *BASOR* 185 (1967),
pp. 2-39) やあか入れしる(ズト)の注の参照)。
- (18) J. Rimmer, *Ancient Musical Instruments of Western Asia
in the Department of Western Asiatic Antiquities, British
Museum*, (London, 1969), p. 23; H. Hartmann, *Die Musik der
sumerischen Kultur*, (Frankfurt am Main, 1960), pp. 41-42,
Fig. 39 (p. 335).
- (19) R. Opificius, *Das altbabylonische Terrakottarelieff* (Berlin,
1961), pp. 54-57; M. T. Barrelet, *Figurines et reliefs en ter-
re cuite de la Mesopotamie antique* (Bibliothèque Archeologi-
que et Historique, 85), (Paris, 1968), pp. 238-239 ㊤' ヌ
ンホタットの十種の田耕タタンベリンとあか入れしる。
トカト' E. D. van Buren, *Clay Figurines of Babylonia and
Assyria* (Yale Oriental Series, 16), (New Haven, 1930),
pp. 89-90 ㊤' ヌトホカトリスとあか。
- (20) Hillers, "The Goddess", pp. 615-616.
- (21) P. Lapp, "The 1963 Excavation at Tell Ta'annek",
BASOR 173 (1964), p. 40, fig. 21. E. Goodenough, *Jewish
Symbols in the Greco-Roman Period*, V, (New York, 1956),
pp. 62-76 ㊤参照。最良とあか入れた後 P. Lapp の立場の
トトト' "The 1966 Excavations at Tell Ta'annek", *BASOR*
185 (1967), p. 36 ㊤参照のトトト'。
- (22) あかト' N. Glueck, *The Other Side of the Jordan*, (New
York, ASOR, 1945), pp. 153.
- (23) S. Ackermann, "And the Women Knead Dough: The
Worship of the Queen of Heaven in Sixth-Century Judah",
Gender and Difference in Ancient Israel, P. L. Day (ed.),
(Minneapolis: Fortress, 1989), pp. 109-124 ㊤㊤; S. M.
Olyan, "Some Observations concerning the Identity of the
Queen of Heaven", *UF* 17 (1987), pp. 161-174; W. E.
Rast, "Cakes for the Queen of Heaven", *Scripture in History
and Theology*, A. L. Merrill and T. W. Overholt (ed.),
(Pittsburgh: Pickwick, 1977), pp. 167-180 ㊤㊤; M. Wein-
feld, "The Worship of Molech and the Queen of Heaven and
Its Background", *UF* 4 (1972), pp. 148-154.
- (24) W. Culican, "A Votive Model from the Sea", *PEQ* 108
(1976), pp. 119-123.
- (25) 「エホシタール神への賛歌」の本文が J. A. Craig,
Assyrian and Babylonian Religious Texts 1 (Leipzig: J. C.
Hinrichs, 1885), 翻字 翻記 注釈が E. Ebeling, "Quellen
zur Kenntnis der babylonischen Religion, II", *MVAAG*
23/2 (1918), p. 4 参照。キルガメッシュ叙事詩に関するトトト'

- E. A. Speiser, "The Epic of Gilgamesh", *ANET* 84b 参照。
 アの坂にびりすはア Ackermann, "the Women Knead Dough", pp. 115-116 各註に補綴する。
 (29) A. Malamat, "Mari", *BA* 34 (1971), p.21. アトアムト
 田城 アト田十のクン神ウハノアヤ書の大の女神との関係
 を把握しよう。
 (30) Rast, "Cakes", p.173.
 (31) C. Meyers, "A Terracotta at the Harvard Semitic
 Museum and Disc-Holding Female Figures Reconsidered",
IEJ 37 (1987), pp. 116-122; 図解 神 "Of Drums and
 Damsels. Women's Performance in Ancient Israel", *BA* 54
 (1991), pp. 16-27.
 (32) Meyers, "Of Drums and Damsels", p.19; "A Terracot-
 ta", pp. 121-122.
 (33) Kletter, *Pillar-Figurines*, pp. 35-36; Keel and Uelinger,
Gods, Goddesses, and Images of God, (Fortress, Minneapolis,
 1998), p. 166. 図解 アムト 神 アムト 神 アムト
symbole, (Freiburg, Herder, 1992).
 (34) Keel and Uelinger, *Gods, Goddesses, and Images of God*,
 pp. 166-167.
 (35) Keel and Uelinger, *Gods, Goddesses, and Images of God*,
 p. 166.
 (36) 例 アムト J. G. May, *Material Remains of the Megiddo
 Cult*, (OIP 26), (University of Chicago Press, 1935).
 (37) Kletter, *Pillar-Figurines*, p.34.
 (38) R. Kletter の文献にのりすはア 註に参照。
 (39) アムトの田城にアムトの神の。
 T 13: Amr, *Clay Figurines*, no. 104.
 N 20: G. A. Reisner, C. S. Fisher, D. Lyon, eds. *Harvard Ex-
 cavations at Samaria 1908-1910*, Vol. I, (Cambridge, Har-
 vard University Press, 1924), Pl. 75a.
 PP 8: J. B. Pritchard, *Sarepta IV: The Objects from Area II*,
 X, (Beyrouth, Université Libanaise, 1998), Fig. 41: 6.
 PP 9: Pricahrd, *Sarepta IV*, Fig. 41: 1.
 PT 8: N. Glueck, *The Other Side of Jordan*, (New York,
 1945), p. 151, Fig. 80 (4); P. Beck, "A Figurine from Tel
 'Ira", *EJ* 21 (1991), p.91, Fig. 12.
 PN 8: Holland, *Human and Animal Representations*, Fig. 18:
 6.
 PN 9: Holland, *Human and Animal Representations*, Fig. 18:
 7.
 PN 10: Holland, *Human and Animal Representations*, Fig. 18
 : 5.
 (40) 図解 アムト T3, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 13; N1, 2, 3, 4,
 5, 6, 8, 9, 10, 15, 16, 17, 18, 20; S1, 2, 3 各アムトの神。
 (41) 単純なアムトの神がネックスだけのアムト
 アムトの神を伴う場合が多い。
 (42) Keel and Uelinger, *Gods, Goddesses, and Images of God*,
 pp. 163-164, 332.
 (43) Gilbert-Peretz, "Ceramic Figurines", p.47.
 (44) アムトの田十の神 アムトの神 M. Dothan,
 "The Musicians of Ashdod", *Archaeology*, 23 (1970), p.310;

キプロス出土の楽団員の土偶については、V. Karageorghis and Y. Olenik, *The Potter's Art of Ancient Cyprus*, (Tel Aviv, 1997), Pl. 94を見よ。

- (42) キールやクレッターは、板状土偶が円盤を水平に構え、柱状土偶が円盤を垂直に構えているのは、単なる技術的問題であるとしている(引照については、註19参照)。しかし、カルタゴ出土の円盤を持った女性土偶の例(G. Picard, *Le Monde de Carthage*, [Paris, Buchet/Chastel, 1956], Pl. 13)などを見るなら、柱状土偶が作られるようになって相当時間がたつてからでも、なお板状で水平のものが作られていたことを示している。これはただ技術的に不可能だったからというよりも、板状土偶の場合円盤を水平に持つ形状のほうが自然に見えるので、あえて水平に円盤を構える表現形式を選んだのではないだろうかと思われる。

(43) 註13参照。

(44) 尤もユダ出土の柱状土偶の中には、かなり大きな円盤を持った例が若干存在する(PS 1, 5)。

(45) 註15参照。

(46) ヨンとロベは、キプロス出土の土偶ではパンを持った女性はまったく違った形式で描かれている場合があるので、円盤を持った女性土偶の持っているものはパンではないと主張しており(M. Von and A. Caubet, "Ateliers de figurines a Kition", V. Tatton-Brown ed., *Cyprus and the Mediterranean World in the Iron Age*, [London, Trustees of the British Museum, 1988], p.30)「クレッターもこれに同意している」(Pillar-Figurines, p.36)。しかし、彼らの挙げている

例はパンをこねている女性像であり、そうした例があるからといって他にパンを持った女性像が存在し得ない訳ではないであろう。

(47) O. Keel and C. Uelinger, *Orientalische Miniaturkunst: Die ältesten visuellen Massenkommunikationsmittel. Ein Blick in die Sammlungen des Biblischen Instituts der Universität Freiburg/Schweiz*, (Mainz, Rhine, 1990), p.24, illus.13; D. Collon, *The Alalakh Cylinder Seals*, (1982), p.74, no.47 参照。

(48) 旧約聖書に対するコンピュータ・コンコルダンスとして「データベース」3rd(コンピュータ聖書研究同好会編、いのちのことば社、1997年)を使用した。

(49) Keel and Uelinger, *Gods, Goddesses, and Images of God*, p.166.

(50) 註20参照。

(51) Keel and Uelinger, *Gods, Goddesses, and Images of God*, pp.163-164, 332.

(52) 註28参照。

(53) フェニキアの例は PPI, 3, 4(?), 5, 7, 8, トランスヨルダンの例は PT2, 8に見られるが、北イスラエル、南ユダの例は本稿のカタログには見出すことができない。

(54) 註29参照。

(54) Keel and Uelinger, *Gods, Goddesses, and Images of God*, pp.166-167.

(56) クンティレット・アジュルッドやヒルベット・エル・コム の碑文、アラッドの神殿に石の柱が2組置かれている

こと、タアナク出土の祭儀台に多神教的な図像が散りばめられていることなどが、しばしば指摘されている。

(57) 註20参照。

(58) 他の女神の可能性もなわいわけではないが、そのような女神がこの土偶の広がりには合致するほど広く信仰されていたという証拠は存在しない。この点では、まず柱の女神についての可能性を検討するほうが順序である。

(59) 土師記 3・31' 5・6。その他アナーナ(エレンミヤ書 1・2他)とどうも地名もアナーナ信仰と関係しているという主張される場合が多い。例えば E. W. Nicholson, *The Book of the Prophet Jeremiah 1-25* (The Cambridge Bible Commentary on the New English Bible), (Cambridge University Press, 1973), p.20 参照。

(60) A. Deem, "The Goddess Anath and some Biblical Hebrew Cruses", *JSS* 23/1 (1978), pp. 25-30; M. S. Smith, *The Early History of God: Jahweh and the other Deities in Ancient Israel* (San Francisco, Collins, 1990), pp.61ff; P. L. Day, "Anat: Ugarit's 'Mistress of Animals'", *JNES* 51/3 (1992), pp. 181-190.

(61) J. Day, "Asherah in the Hebrew Bible and North-Western Semitic Literature", *JBL* 105/3 (1986), pp. 385-408; 同著者 "Asherah", *The Anchor Bible Dictionary*, Vol. 1 (1992), pp. 483-487. W. A. Maier, "Asherah: Extrabiblical Evidence", (Atlanta, 1986) を参照。

(62) 註13参照。

(63) J. Day, "Asherah in the Hebrew Bible", p. 389.

(64) A. Lemaire, "Déesse et dieux de Syrie-Palestine", p.134; P. L. Day, "Anat"; S. A. Wiggins, "The Myth of Asherah-Lion Lady and Serpent Goddess", *UF* 23 (1991), pp.383-394.

(65) 註12参照。

(66) アシメタロトについても数多くの研究がなされているが、最近のものとして J. Day, "Yahweh and the Gods and Goddesses of Canaan", in Dietrich and Klopfenstein, eds. *Ein Gott Allein?* (1994); M. S. Smith, "Yahweh and other Deities in Ancient Israel: Observations on Old Problems and Recent Trends", in *Ein Gott Allein?* 等参照。

(67) Keel and Ueliger, *Gods, Goddesses, and Image of God*, pp. 292-294 参照。

(68) 註47参照。

(69) アシメタロトがフェニキアの女神と考えられていたことは、「シドン人の神アシメタロト」という聖書の表現(列王記上 11・5、33)にも表されている。また、「シドン」シロ「ビュプロス」キティオンといったフェニキア人の町では、アシメタロトが主神として礼拝されていたことが考古学的に知られている。

(70) G. Keown, et al., *Jeremiah* 26-52, (Word Biblical Commentary), (Dallas, TX, 1995), pp. 266-268.

(71) 聖書に記されている天の女王の儀式にも、戦争の女神としての側面を見ることが出来る。エレンミヤ書7章においても44章においても、天の女王の礼拝はバビロン捕囚が現実的脅威となっている状況と結びつけられて語られており、特に44・18では天の女王の礼拝を止めた時にユダが「剣で

滅ぼされた」という礼拝者たちの思想が紹介されている。

Keown, *et al.*, *Jeremiah* 26-52, p. 267 参照。

- (22) W. G. Dever, "Ancient Israelite Religion : how to reconcile the differing Textual and Artifactual Portraits?", in Dietrich and Klopfenstein, eds. *Ein Gott Allein?*, pp. 105-125. 反対の立場としては、Reed, *Asherah in the Old Testament* 及び Kletter, *The Judean Pillar-Figurines*, p. 76 参照。